



かけはし

発行：峡南教育事務所
地域教育支援スタッフ

第171号
2020年12月・2021年1月号

南巨摩郡富士川町鯉沢771-2
TEL:0556-22-8154
FAX:0556-22-8144

HPでも御覧になれます。
<http://www.pref.yamanashi.jp/kyoiku-mk/index.html>



目次： ページ

令和2年度峡南地域
子育て学習会開催 1

社会教育委員の見える
化を 2

市川中学校1年
峡南・市川三郷地域
めぐり 2

富士川町民話紙芝居
増穂商業高英訳
ゆずカフェで読み聞かせ 3

峡南高校クラブ科 4



令和2年度峡南地域子育て学習会開催

山梨北中学校教諭で日本アンガーマネジメント協会認定ファシリテーター広瀬竜太先生から、幸せな人生のためのアンガーマネジメントについて学びました。

講演のポイント

講演の最初に三つのポイントが提示されました。①アンガーマネジメントとは何か ②私たちが怒らせるものの正体 ③アンガーマネジメントの三つのコントロール
詳しい内容については、号外レポートをご覧ください。

広瀬先生よりメッセージ

峡南地域の皆様、今回はお招きいただきありがとうございます。皆様から学んできたことをお伝えできる機会を与えてくださったことに感謝申し上げます。「アンガーマネジメント」は、感情にお

ける「セルフコントロール」にお役立ていただけるのではないかと思います。セルフコントロールは、どんな状況下であっても、人生のハンドルの自分で握って生きていくためには必要な力だと思えます。感情はモニターです。私達に何かしらのサインを送ってくれる大事なシステムです。特に怒り感情は扱いが難しいのですが、アンガーマネジメントのスキルが、皆様のお役に立つことができたら幸いです。「子どもの笑顔は大人の笑顔から」皆様が、怒りに囚われることなく幸せな人生を歩み、目の前にいる子ども達の笑顔が溢れる地域が育まれていくことを心から願っております。

峡南教育事務所ホームページには会場での質問の回答も掲載しています。

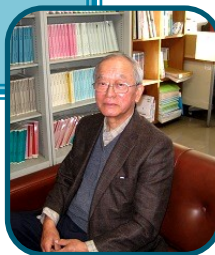
社会教育委員とは

任期は二年で、一般的には、社会教育や学校教育に関係する団体に所属している人と学識経験者の中から教育長より委嘱されますが、高校生が務めている県もあります。学校教育以外の「全ての教育に関すること」に携わり、最近では生涯学習とも捉えられています。「放課後子どもは何をしているか、また居場所はあるか」「高齢者が習ってみたいこと」「地域への希望」など教育委員会から求められたことの調査やアンケートを行う

社会教育委員の見える化を！

山梨県社会教育委員連絡協議会（社教委連）

会長 塩島明美さん（市川三郷町）



ひとにほっぺちやかせない!!
社会教育委員としての目指すこと

社会教育は戦前からありましたが、戦後本格的に始動し、ひとりひとりみな平等の理念の下、自分で生涯を楽しむためのものとして。最近では多様性を尊重しながら、学びの環境を整備する必要性の提言を行っています。現代の社会教育委員の

（二面に続く）

新年明けましておめでとうございます。

新型感染症に気を付けながら健康第一で、この冬を乗り切っていきましょう。

今年もよろしく願います。

意見を述べるという役割があります。行政や学校だけでは思いつかないことを補っていただきます。また「個人」が任命される独任制で、委員会ではないので、個人としても社会教育行政に対して意見を述べる事ができます。何かを決定したり、企画したりすることはなく、指導や助言をするという立場にあります。

（二面から続く） 取組の根底にあるのは、人生百年時代をいかに有意義に過ごすかということ。そのためには、国籍や障害の有無を超えて、誰もが参加できるような地域社会になることが必要だと塩島さんは考えています。「ひとりのぼっちにさせない」という信念を持って、地域づくり人づくりに努めています。



「人とのつながりをもっと利用しなければ」と思わせてくれる愛読書「ソーシャル・キャピタル入門」

活動の中で

塩島さんは、社会教育委員会や会長をしながら、さまざまな市町村と情報を交換したり、全国の人と知り合いになったことが自己研鑽となり、広い視野で地域社会を見る目を持つことの大切さを学んだと言っています。また、社会教育を通じて地域作りに参加できることに、喜びを感じるとも言っていました。

社会教育委員を見える存在に

目指すところは、地域の人権擁護団体や社会福祉団体とのつながりをさらに活かして、地域の人の経験や専門性を生かせるような場を提案しつつ、各団体

の横のつながりを体系化するということです。また塩島さんには、教導者の養成にも関わりたいという思いがあります。

令和四年度には、社教委連の関東大会が山梨県で開催されます。他県の人に山梨県の美しい自然を感じてもらい、お互いに刺激を受けながら、もう一度地域を見直すきっかけになることが目標です。

社会教育委員は、地道に地域のために活動しています。情報を集めたり、助言してくれたりしますので、習ってみたいことや自分の知識や技能を生かす場所など、有意義な人生のためにぜひ相談してください。多くの方がその存在を知ることがよりよい活動の第一歩となります。

十一月五日(木)に、市川中学校一年生は校外学習で市川三郷町の各所を訪ねました。

スローガンは(地域・仲間と、集団行動・日常生活に)「繋ぐ」

地域について学ぶこと、集団生活を修学旅行につなげることに、社会のルールを学ぶことが今回の目的です。



青空の下、出発☺

出発式

朝八時二十分に始まりました。引率の望月先生は「社会の中で大切なことを意識して、修学旅行へつなげていきましょう。市川中のことを褒められるととてもうれいので、生徒代表として行動して下さい」というお話をしました。生徒は元気に校舎に向かって挨拶し五名の先生と出発しました。

当日の足取り

午前中は五十一名の生徒が四つの班に分かれ、青洲高校・市川手漉き和紙夢工房・if(市川三郷町生涯学習)センターを交代で訪問しました。午後は、生活班で計画を立て、寺院や名所を自主見学しました。

青洲高校見学

学校全体の説明を受け、四階から図書スペースを下に見て、細部にこだわりのある校舎を歩きました。和紙や山梨県産木材の使用、また青洲ブルーや廊下の黒などの色使いに生徒達は感銘を受けていました。

夢工房で和紙漉き(すき)体験

手順は、紙が溶けている水をすくって水を切り、美術の時間に切り抜いてお



→夢工房

↑町立図書館

市川中学校1年 峡南・市川三郷 地域めぐり

青洲高校で柱の和紙を確認↑

4階から見学↑



た色紙を枠に入れ、布の上で押さえて四、五時間乾燥させます。二名の工房の方に教えてもらい、三枚ずつハガキを作りました。生徒は、色紙の位置決めが難しかったと言っていました。商工観光課の中込さんは、和紙の原料や歴史について教えてくださいました。市川の和紙は八〇四年に始まり、上質で肌吉紙と言われました。幕府にも献上され、職人達は優遇されました。昭和初期には二五〇軒あった手漉き和紙業者も、現在は一軒豊川製紙になってしまいました。したが、峡南地区では卒業証書を紙漉きしている学校も多く、その伝統は受け継がれています。

ifセンターにて

町立図書館本館では本の借り方や検索の仕方、出入りロケットなどの施設の説明をしてもらいました。会議室で防災・減災について防災課の方から学びました。日本三大急流のうち球磨川と最上川は二〇二〇年七月に氾濫したので、残る富士川でも注意が必要なこと、市川三郷町で過去に発生した災害と恐ろしさ、また、日頃から災害に対して備えておくことなど、生徒は集中して聞き熱心にしおりに記入していました。

地域との繋がり

感染症を考慮した新しい計画でしたが、学年の先生と町で協力して実施できました。生徒は礼儀正しく挨拶やお礼をし、町の人はそれに応えてくれました。温かい町の雰囲気伝わってきました。



大森きよ子さん



宮澤三重子さん

後世に残そう！ 富士川町の民話 紙芝居がつなぐ地域の輪

所懐しと並べられた
紙芝居
30以上あります



紙芝居創作のきっかけ

宮澤さんは、千秋さんの父親に民話を話してもらったことで増穂町や庶民の生の生活を知ることができました。また、どの作品も、地域と自然と一体の人間生活が語られていると感じました。民話では、人々は貧しくても助け合い豊かに暮らしており、地域の素晴らしさが描かれています。それは地域を愛することに通じ、その精神を失わなければ、水害やそれ以外の災害も減るのではないかと考えました。そこで自分たちの世代が民話を残さなければならぬと思い、読み聞かせの「ぐりぐらの会」を一緒に主宰している大森さんとともに、絵で伝えて語ることができ、誰でも楽しめる紙芝居という方法を選びました。千秋さんが画家であることも好都合でした。

紙芝居作成とイベント

物語の元になっているのは、町史や青年文化部の資料、町の人から民話を聞いてくるという小学生の宿題、学校の演劇の台本などです。十分に資料が残っていない場合には、宮澤さんと大森さんは聞いた話を足したり、創作したりしました。ただし、嘘にならないように、千秋さんが物語の舞台になった場所を何度も訪れ、本物らしさを表現しました。

現在は、ぐりぐらの会で子どもに読み聞かせるだけでなく、さまざまイベントに参加し、紙芝居を通して地域教育にも関わっています。

増穂商業高校 民話を英語に

本誌でもお伝えした「富士川学」で地域について学んだことをきっかけに、

町内に伝わる昔話、『二十騎ヶ原』を英語で表現することに挑戦しました。始めにぐりぐらの会のみなさんが地域に関係のある民話を紙芝居で披露してくれました。その後



生徒はグループに分かれセリフを英訳し、それぞれが役を決めて、英語で発表しました。最近注目されている「地域から世界へ」の視点の第一歩としてよい取組となりました。

ゆずカフェにて

ゆずカフェとは



富士川町では認知症の方とその家族、地域の方々を含め、誰でも集える場所として平成二九年より「ゆずカフェ」を開催しています。新型コロナウイルスの感染拡大防止のため閉鎖されていましたが、八ヶ月ぶりに再開しました。通常は保健福祉支援センターで、ボランティア手作りのお菓子を食べて話したり、ピアノが得意な参加者の演奏に合わせて歌を歌ったりしていました。現在は各地域を回って小規模で行い、お菓子は持ち帰ってもらうなど感染症対策を十分にしています。

紙芝居開始

今回の開催地である鵜沢に合わせて、十谷村の楽しい話で、いたずら狐がこらしめられる『善右衛門と狐』を大森さんが読みました。これは学童でも人気があるそうです。その中で狐が大きな岩の上で叫ぶという場面があり、参加者は「どこの岩か」という質問をしたり、「狐なんていただね」と感想を話したりしていました。次に、宮澤さんが『姫ん淵と下女ん淵』という旧穂積村に嫁いできた姫と下女が身投げをするという悲しい話を読みました。実際の淵を訪れた経験から、宮澤さんにとってとても印象深い話だということでした。姫の実家である仙洞御所にちなんで、仙洞田という地名が生まれたことも話されました。民話を聞くと、地名の由来や昔の人々の生き生きとした生活がわかり、地域を知る良いきっかけになりました。参加者は、熱心に耳を傾け、民話の世界を楽しんでいました。



かじかざわ児童センターで開催

十一月十日(火)、午後一時三十分には、テーブルの上には、おもちゃ、家電用品、昔の校舎や町の様子など昭和の懐かしい写真が置かれていました。昔のことを思い出しながら話をすると脳の活

今年度が最後の卒業生

現在、嶺南高校には電子機械科、クラフト科、土木システム科の三科があります。学校は令和三年度でその歴史に幕を閉じますが、クラフト科は今年度で終了します。金属や木材、和紙、モルタル（砂利の入っていないコンクリート）などを使った、陶芸を行ったり、地域産業に貢献することも視野に入れながら、クラフト科の生徒はさまざまなものづくりを行ってきました。その中で、課題研究の授業を訪問しました。

生徒の作品

おしゃれな間接照明↓



↑かわいらしい
家庭用具入れ



課題研究

三年生が一年間を通して、高校での集大成として作品を完成させます。完成だけが目的ではなく、どうすればうまくいくのかを考えたり、工夫したりする過程も重要です。クラフト科では、生徒達はそれぞれの希望でモルタル造形班、木工班、金属加工班に分かれて、作品制作に取り組んでいました。

モルタル造形班

六名の生徒達が、本が開いた形をした置物を作成していました。先生が工程を板書しながら説明し、生徒

嶺南高校 クラフト科

楽しい！他ではできないものづくり



は集中して作成に取り組んでいました。モルタルで造形した後、和紙を貼り、実際の本に近づけていきます。本のページの重なりや和紙を貼る部分を一つ一つ丁寧に作り、作品を大切に扱っていました。

木工班 椅子づくり

三名の生徒が、収納ができた、模様がついていたり、座りやすさにこだわったり、それぞれが作りたいと思ったデザインを形にして独創的な椅子(写真↓)を製作しました。名前のプレートも、文字に校章を入れたり、好きな言葉を入れたり、文字の大きさや形を工夫し、作品名が刻まれています。訪問時にはすでに課題研究の作品は完成していたので、「おやこ工作教室」や「みのワーク」などで使う組み立て椅子の部品を作っていました。先生も含めた四人の共同作業で、慣れた手つきで作業をしていました。



↑機械の扱いも慣れたものです



金属加工班 指輪づくり

三名の生徒が熱心に緑色のリングに形をつけていました。チューブワックスという指輪の形をつくるもので、形ができたら溶けた金属を流し入れ、それを撮ります。優しく丁寧に、高温でワックスを溶かす小さなリングの形を整えて、指輪が形通りになるといいます。



ものづくりの精神 できあがったものに愛情を！

クラフト科では製図を描くというよりは、自分の頭の中にあるものをスケッチやデザインを通して形にしていきたいと思います。つくることを楽しみ、お互いに意見を出し合って、良い方法を見つけ、うまくいかなかったときの検証も欠かしません。やり方は自由で、それぞれ違った物ができていきます。楽しいからさらに学びたい、最終的に技術が上がることを目指しています。そうすることで完成した作品を大切に思い、愛着を持つようになります。」

授業を受けていた生徒だけでなく、先生方全員が楽しんでくださったのが印象的でした。

う仕組みです。肉眼ではわからないざらつきもなめらかにしなければ、できあがりがないと、拡大鏡をつけながら作業でした。作品完成後に、美しく見えるよう

りを学べたことがよかったと言っていました。自分にも増して、自分の考えたデザインが完成した時や、仲間と協力しながら、工程の間違いを見つけないことができたり、分からないことがわかったりしたとき嬉しかったと言っていました。十一人という少ない人数でしたが、その分、ひとりひとりが大切にされ、クラスメイトと和気あいあいと学校生活を送れたそうです。今年度で終わりになってしまふのはさみしいですが、県内唯一の科だったので誇りが持てると思っています。生徒もいました。

生徒の思い

多くの生徒が、幅広くさまざまな素材を使ってものづく

どの生徒も作品を作り上げたという達成感を持ち、クラフト科の教育や精神は生徒達に受け継がれてい